



## 目 次



はじめに .....	1
高木家と合戦 .....	2
高木家の軍制 .....	8
高木家と西洋流砲術 .....	13
高木家の武術 .....	16
ししがり 猪狩 .....	21
城縄張り図 .....	22



## はじめに

名古屋大学附属図書館が所蔵する高木家文書は、旧旗本・西高木家に伝来した10万点近くにのぼる一大古文書群です。

高木家は、本文書群を伝えた西高木家（2300石）のほか、東高木家（1000石）、北高木家（1000石）の三家からなり、一名美濃衆とも呼ばれ、江戸に常駐した一般の旗本とは異なり、知行地に在住して参勤交代をおこなう交代寄合の格式をもつ家柄でありました。関ヶ原合戦直後に近江・伊勢と国境を接する美濃国石津郡時・多良両郷（現在の岐阜県大垣市上石津町域）に領地を宛てがわれて以降、明治維新にいたるまで同地を支配し続け、その間、幕命により木曾三川流域を管理する「川通御用」の役儀を勤めたことで知られております。また、維新後も西高木家の当主は同地に居住しつづけ、学区取締や郡長・衆議院議員などの公職を歴任しました。

このため高木家文書には、全国的にも貴重な治水関係資料が豊富に存在するほか、旗本領主制の実態に迫る村方支配や家臣関係の資料、系譜・日記・書状・財政など家政に関する資料から維新以降の資料にいたるまで多彩な内容の古文書・古記録・絵図類が伝わっております。

今回の特別展では、旗本家文書としては傑出した規模と内容を有する高木家文書のなかから、「高木家の武」をテーマに軍備・武術に関わる古文書・絵図類・合戦図を紹介いたします。高木家のなかで軍備・武術がどのように扱われ、変遷していったのか、従来あまり取り上げられてこなかった武士としての側面に注目したいと思います。

なお、本展を開催するにあたり、ご協力くださいました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

## 高木家と合戦

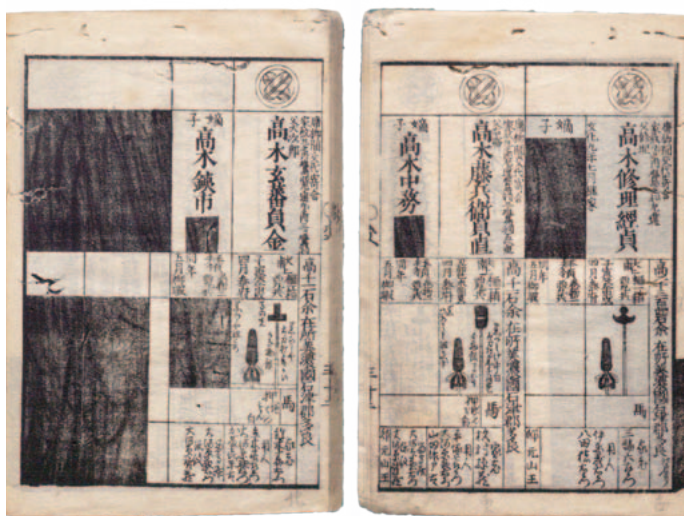
高木家は、もとは養老山地東部一帯に勢力をもっていた在地領主で、斎藤道三や織田信長、織田信雄に仕えた。小田原合戦後、主人の織田信雄が豊臣秀吉に改易されたため、高木一族の貞利（西家初代）、貞友（東家初代）、貞俊（北家初代）、貞秀（後に加賀前田家に仕える）は美濃を離れ、甲斐の加藤光泰の許に身を寄せた。文禄元(1592)年の朝鮮出兵では加藤に属して渡海しており、かつては陣容を記した「豊臣秀吉朱印陣立書」や「朝鮮国内裏并陣場之図」なども伝わっていた。

その後、徳川家康に召し出され、一族四人は関東に知行を与えられた。慶長5(1600)年の関ヶ原合戦においては、貞利・貞友・貞俊は東軍の道案内を首尾よく務め、多芸口を焼き討ちにするなどの功績を立てた。その軍功により、三人は共に加増のうえ美濃国時・多良両郷に領地を宛てがわれた。貞利の跡を嗣いだ貞盛および貞友・貞俊は慶長19(1614)年の大坂冬の陣、翌年の夏の陣にも参陣し、枚方の防衛に従事するなどの戦功をあげている。

### 1 武鑑

江戸時代後期〈筒井稔氏所蔵〉

武鑑とは、江戸時代民間書肆から発刊された大名や幕府役人の名鑑である。知行高・知行所在地・嫡子名・槍印などの情報を記す。本史料には、高木修理経貞（西家11代）、高木藤兵衛貞直（東家10代）、高木玄蕃貞金（北家15代）に関する情報が掲載されている。



## 2 高瀬新次郎より橋本周右衛門宛書状 年未詳 6月29日〈高木家文書〉

同じ交代寄合である那須家の家臣高瀬から西高木家江戸留守居橋本へ出された書状。書肆出雲寺から出版された四衆方武鑑の改訂にあたり、三河衆中島家が改訂に反対し差し支えが生じている様子が述べられている。四衆とは江戸城廊下での將軍への拝謁を許された交代寄合のことで、領地所在地から美濃衆・那須衆・三河衆・信濃衆の四つに分かれていた。



## 3 先祖書

寛政3(1791)年10月〈高木家文書〉

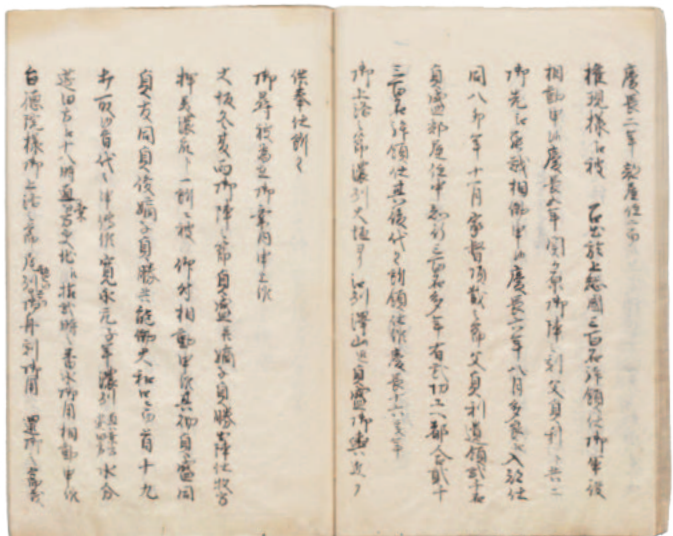
高木家の元祖貞政から高木貞臧(西家10代)までの事跡をまとめた記録。展示部分は3代貞利の箇所。徳川家康の命により、関ヶ原の戦いに際して貞利が兄弟と共に東軍の道案内を務めたこと、多芸口を焼き払い駒野に進出していた西軍を大垣へ撤退させる戦功を上げたことを伝える。

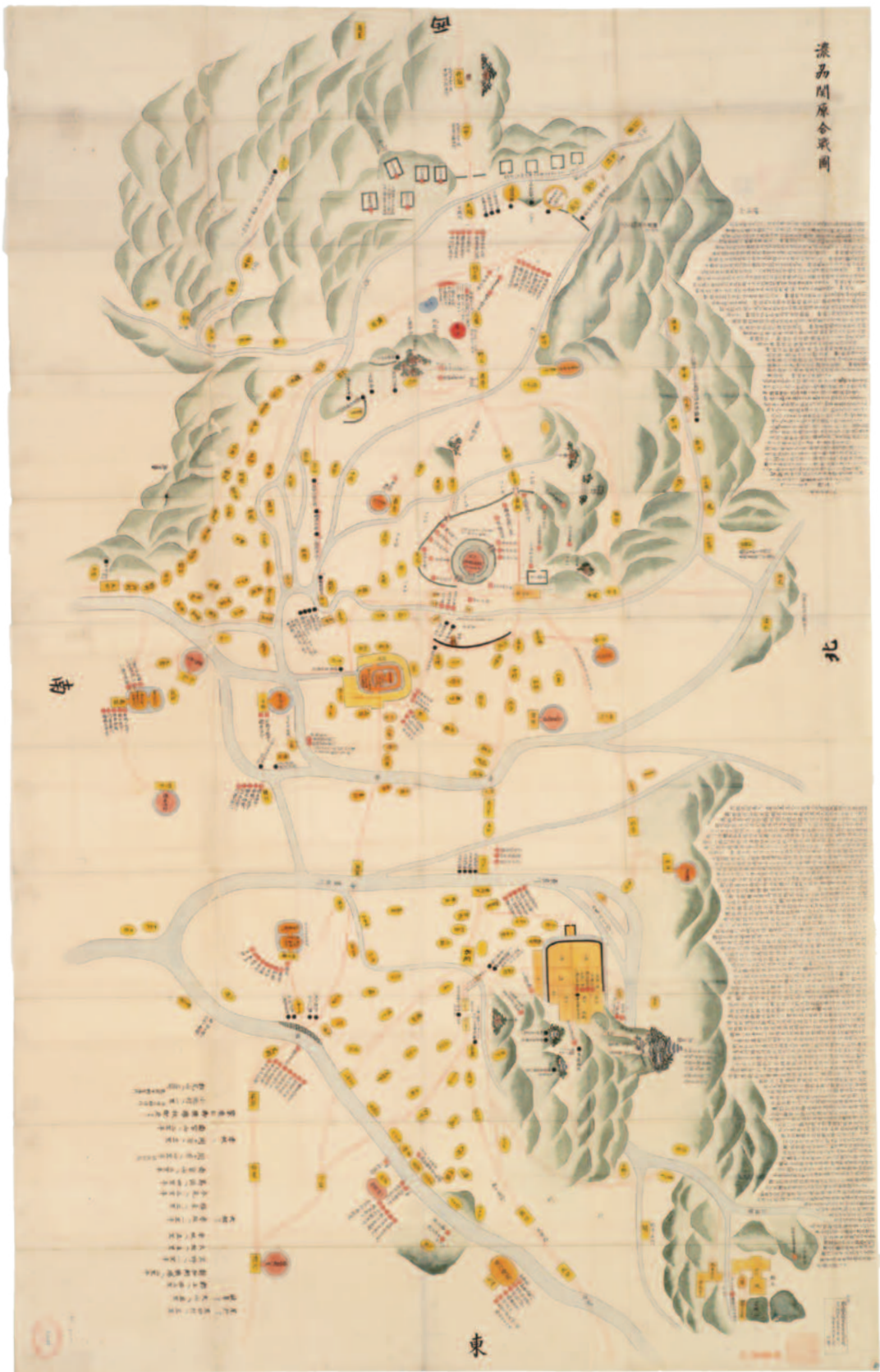


## 4 先祖書

弘化3(1846)年8月〈高木家文書〉

高木経貞(西家11代)までの事跡をまとめた先祖書。【3】に比べて内容が格段に詳細になっている。展示部分は西家4代貞盛の大坂冬の陣・夏の陣に関する箇所。両陣において、貞盛と嫡子貞勝が出陣し東・北家と共に牧方(枚方)の守備についたこと、大和口において19の敵の首級を討ち取ったことが記されている。





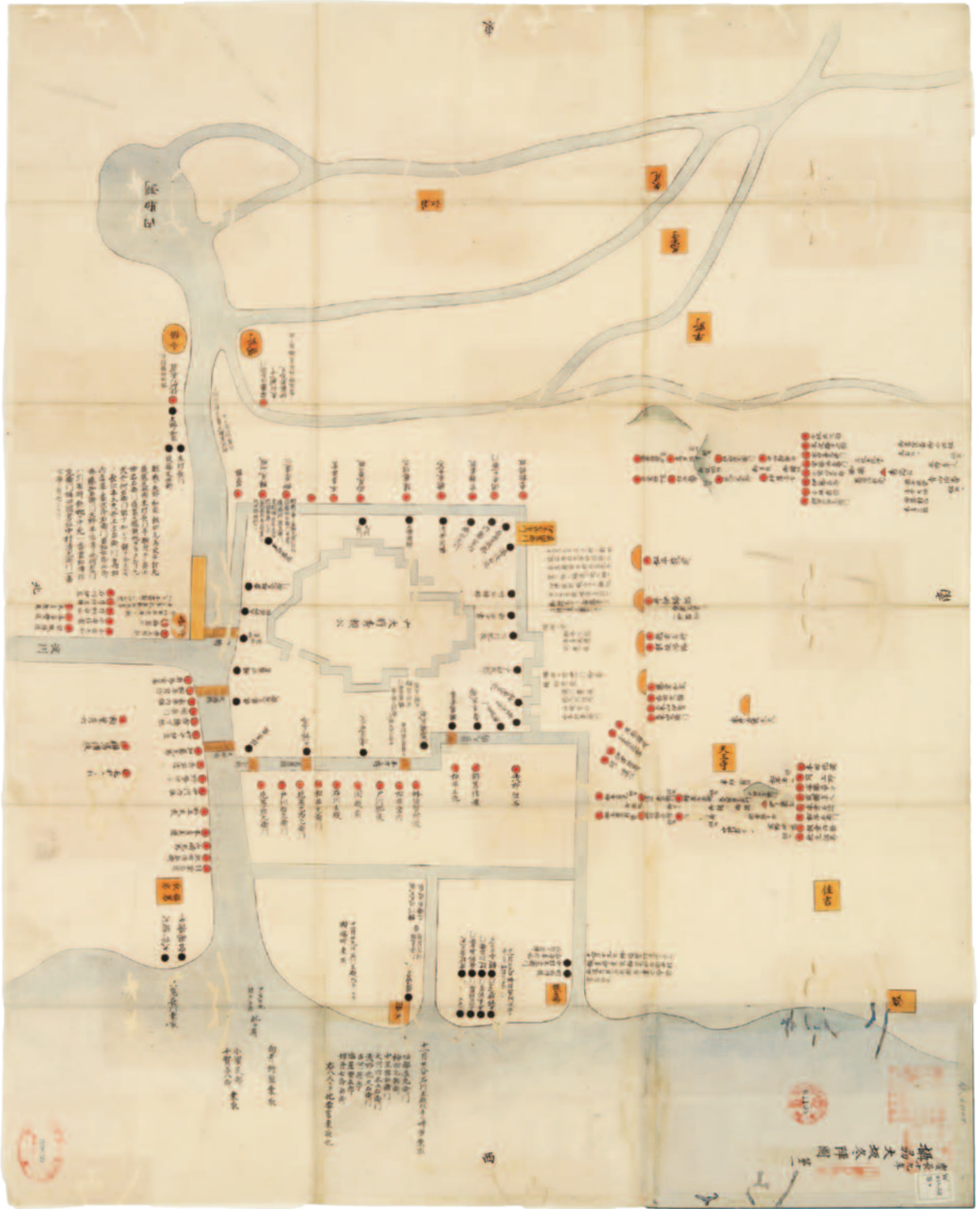
パネル 1 濃州関原合戦図 年月日未詳〈神宮皇学館文庫〉

関ヶ原の戦いにおける東西両軍の配置を描いた絵図。9月15日の本戦における配置と共に、それ以前の両陣営の配置を記している。また、『烈祖成績』『家忠日記』から戦況に関する記述を引用し掲載している。



5 慶長十九甲寅冬・元和元乙卯夏 大坂御陣之図 年月日未詳〈高木家文書〉

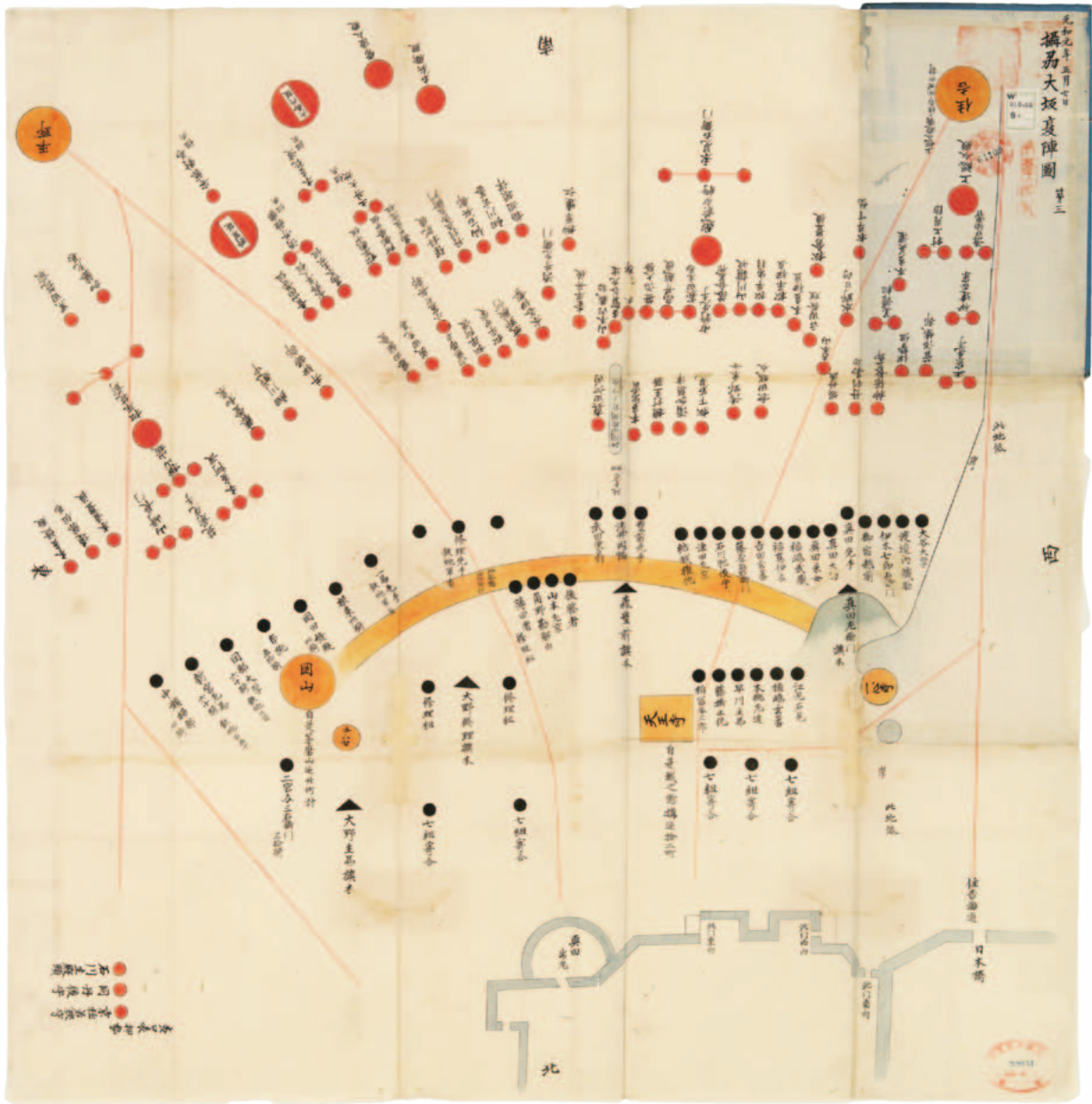
慶長19(1614)年におきた大坂冬の陣と、翌年の大坂夏の陣に関する情報を描き込んだ絵図。大坂冬の陣に関する情報については朱で▲が、大坂夏の陣については、同じく朱で○が付けられている。大坂冬の陣の際に、加賀藩前田家や福井藩松平家が大坂城攻略のために真田丸前に築いた築山が描かれるなど、興味深い情報が記されている。



6 摂州大坂冬陣図 年月日未詳〈神宮皇学館文庫〉

慶長19(1614)年の大坂冬の陣における両軍の配置を描いた絵図。徳川方を赤、豊臣方を黒で書き分けている。主に豊臣方が大坂城に籠城した12月朔日以降の配置を描く。ただし、今福の木村長門守などのように籠城前の配置も一部書き込まれている。





7 摂州大坂夏陣図 年月日未詳〈神宮皇学館文庫〉

慶長20(1615)年5月7日の天王寺・岡山の戦いにおける両軍の布陣を描いた絵図。【6】同様、徳川方を赤、豊臣方を黒で書き分ける。なお、豊臣方の武将で森豊前とあるのは、毛利豊前守勝永のこと。勝永は毛利姓を名乗る前は森姓を使っていた。

## 高木家の軍制

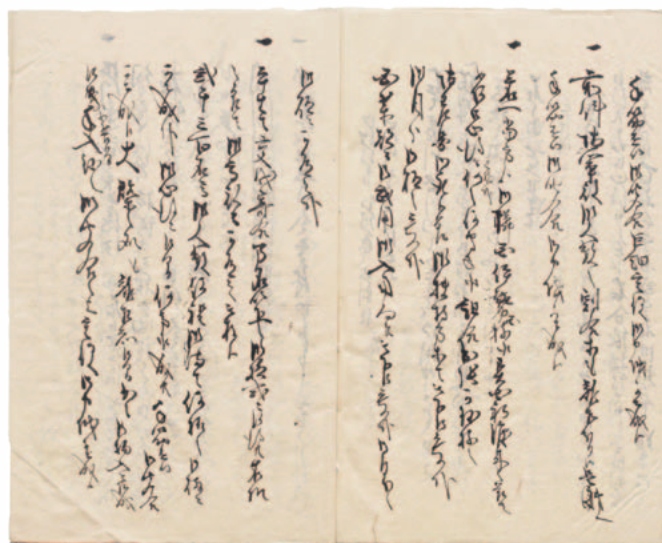
寛政期(1789-1801)に入ると日本近海にロシア船をはじめとする異国船が出没するようになる。それに対応するため、幕府は、寛政3(1791)年9月に異国船来航時の取り決めを定める。その後、天保13(1842)年には海岸線に領地を持つ大名・旗本・寺社に海防計画書を提出させた。また、内陸の大名には異国船来航時に沿岸地域への援軍や、江戸表の警衛に従事するよう命じた。

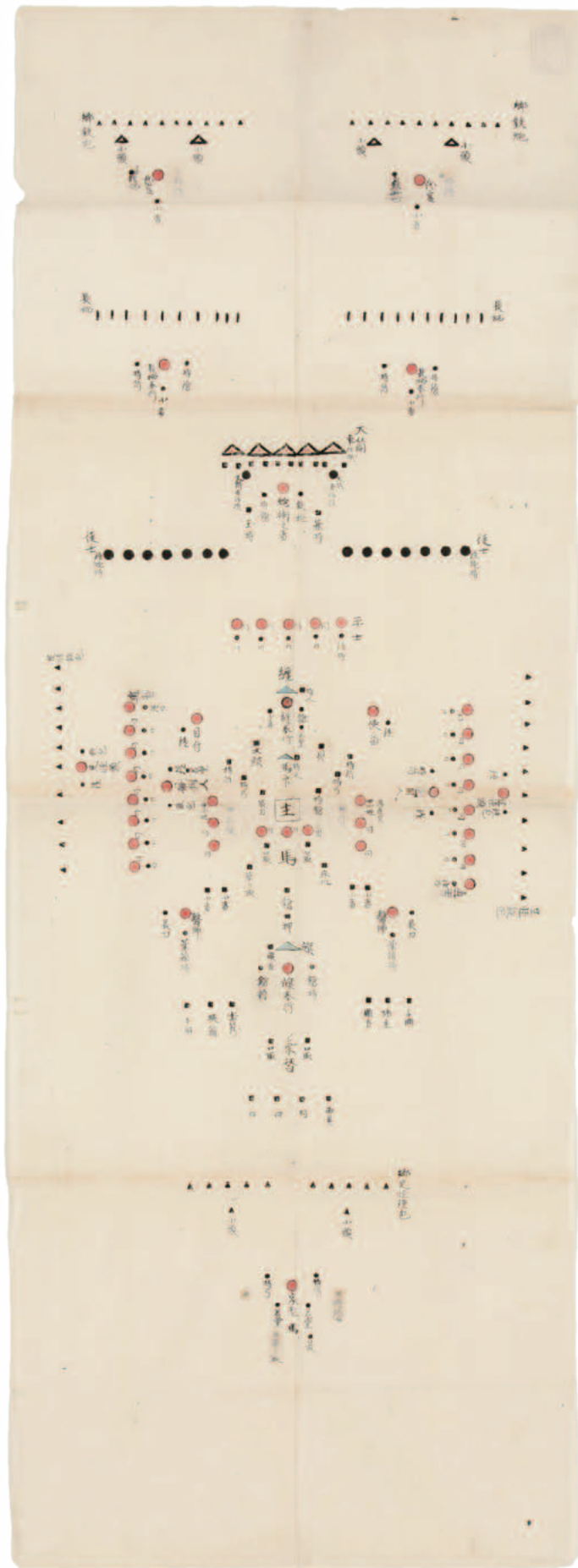
もともと、西高木家は領地が内陸にある旗本であったため、幕府の海防強化の動向から外れ、特段軍備に力を入れてはいなかった。ところが、嘉永2(1849)年、幕府が全旗本に対して、今後は役向・石高に関係なく海防に動員するとの触を出したことにより、西高木家も軍事動員に備える必要が生じた。そこで、西高木家では、翌年から、2300石の旗本が負担すべき軍役について江戸表において調査させ、その上で部隊編成に着手し、何度も案を練っていくこととなる。

### 8 江戸御留守居江御用状控

嘉永3(1850)年5月8日〈高木家文書〉

寛政期頃(1789~1801)から日本近海で外国船が出没するようになる。そこで幕府は海防を強化していき、嘉永2(1849)年には全旗本に対して海防に動員する触を出した。本史料は、出陣を命じられた際に軍役として負担すべき人数などを調べるよう江戸留守居役へ命じた文書。それまで西高木家が軍役につき知識を持っていなかったことが確認できる。



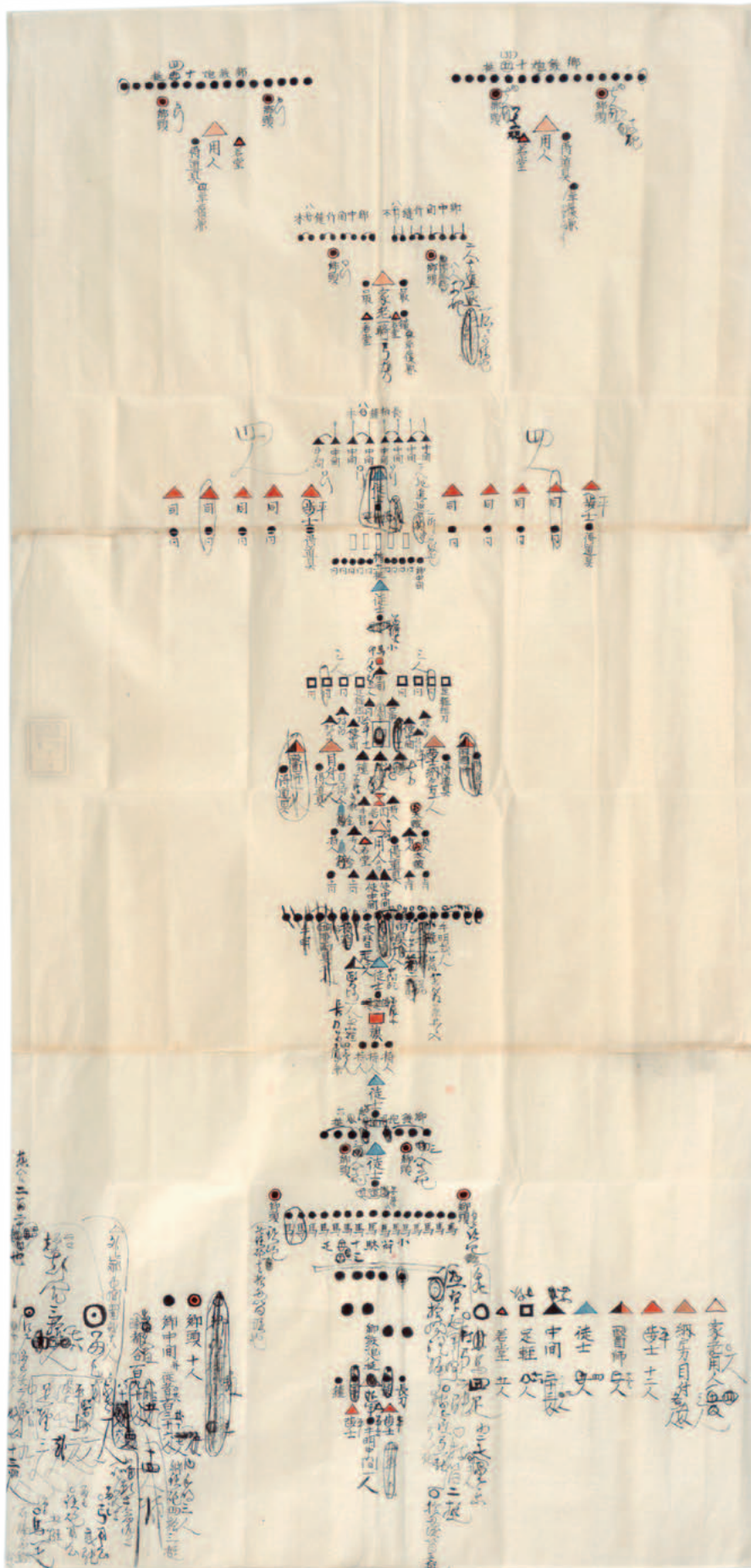


9 陣立図 嘉永3(1985)年頃(高木家文書)

嘉永2(1849)年の全旗本を海防に動員するとの幕府の意向を受け、西高木家も出陣に備え、部隊編成に着手する。本史料は、部隊編成を考えるにあたり作成された陣立図である。ただし、総人数が二百名を超えることや、当時西高木家が所持していなかった大筒が書かれていることから、案で終わったもの、ないしは参考として作成されたものと推測される。







パネル 2 陣立図下書 嘉永 3 (1850) 年頃 (高木家文書)  
陣立図の下書。細かな訂正がされている。【9】の陣立図と基本的配置は似通うが、小荷駄が描かれるなど【11】と共通する部分も見受けられる。西高木家が、試行錯誤しつつ、自家に適合した陣立を作ろうと努力している様子がうかがわれる。

## 高木家と西洋流砲術

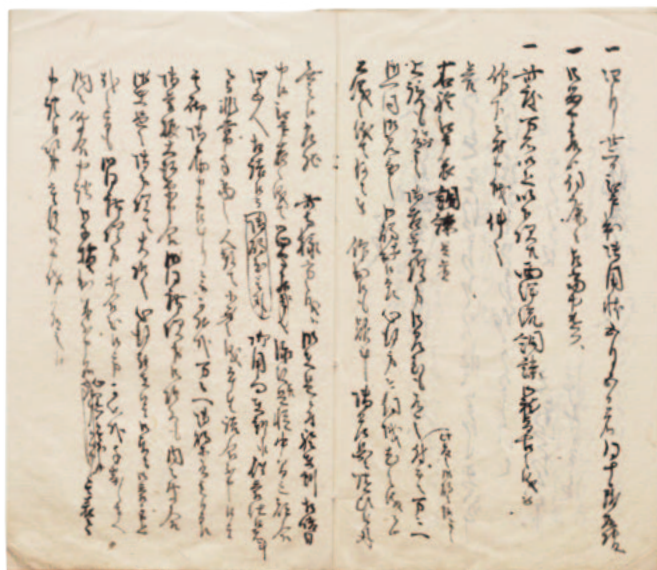
嘉永6(1853)年のペリー来航を機に、欧米の軍事力の強大さを目の当たりとした幕府は、全国防衛が可能な洋式軍隊の創出を目指し、西洋小銃・大砲の生産に取りかかるとともに、大名・旗本に対して西洋流砲術の修行を命じた。西洋流砲術とは、高島秋帆が当時ヨーロッパで広く採用されていた歩兵・騎兵・砲兵の三兵種を連帯させて戦闘をおこなう三兵戦術を元に打ち立てた砲術の一流派である。従来の砲術の目的が個人の射撃技術を引き上げることにあったのに対し、西洋流砲術は臼砲・榴弾砲<sup>きゅうほう・りゅうだんほう</sup>で散弾などを敵に打ち込むと共に、密集隊形の銃陣を縦横に動かし一斉射撃をおこなうなど、集団による戦闘力形成に主眼を置いた点が大きな違いであった。

幕府の命令のため旗本であった西高木家も西洋砲術修行をおこなう必要があったが、江戸から遠く離れた多良の地にいることをいいことに、なかなか西洋流砲術を受容しなかった。西高木家が西洋流砲術を受容するのは、文久2(1862)年になってからである。このとき西高木家では、大垣藩から指南役を招聘して家臣・領民に修行させるとともに、洋式の大砲・小銃の購入や製作をおこなっている。

### 13 江戸留守居への御用状下書

安政3(1856)年〈高木家文書〉

ペリー来航後、幕府は集団戦に適した西洋流砲術を基盤に軍の洋式化を進める。その一環として、大名・旗本へ西洋流砲術修行を命じた。本史料は、修行成果を見せるよう幕府から求められたら、国元では稽古をおこなっているが、江戸ではまだなので見せられない旨を返答せよと命じた書状下書。実際には国元でも西洋流砲術稽古は、おこなわれていなかった。



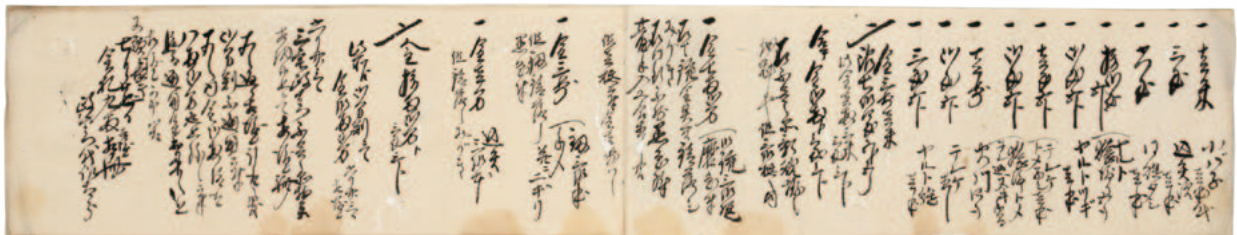
14 鉄炮大筒方鑄小屋諸色御入用附留覚帳 文久2(1862)年11月〈高木家文書〉

文久2(1862)年、西高木家は西洋流砲術を軸とした洋式軍制を採用する。それに伴い、西洋流砲術で使用されている大砲や銃の自作を決め、作業場として鑄小屋を建てた。本史料は、鑄小屋の設備と用具の費用を書き上げた帳簿。西高木家は、この鑄小屋で大砲2門と小銃30挺を製作した。小銃は、先込式ミニエー銃を模したようだが、性能は劣っていたと思われる。



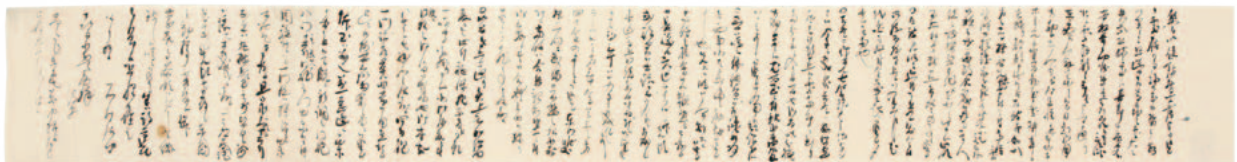
15 ライフル短銃三拾挺御修覆御入用帳 明治2(1869)年6月〈高木家文書〉

ライフル銃の修理に必要な費用を書き上げた帳簿。ライフルとは銃身に刻まれた螺旋状の溝のことで、これがあると打ち出される弾丸に回転がかり、弾道が安定して飛距離が伸びる。ただし、当時日本で小銃にライフルを刻むことに成功したのは幕府のみだった。西高木家が模したミニエー銃もライフル銃だが、完成した小銃にライフルは刻まれてなかったであろう。



16 石川辰助より喜多川恵之右衛門宛書状 慶応4(1868)年4月9日〈高木家文書〉

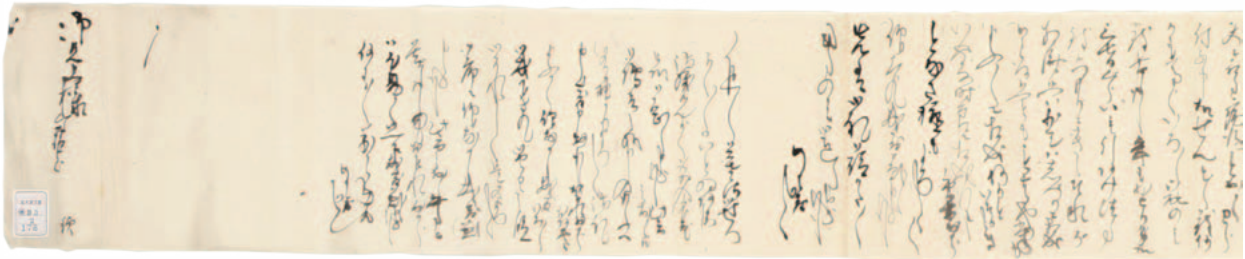
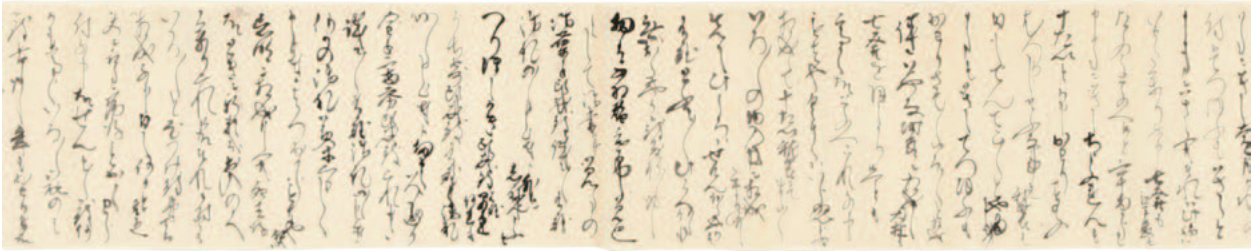
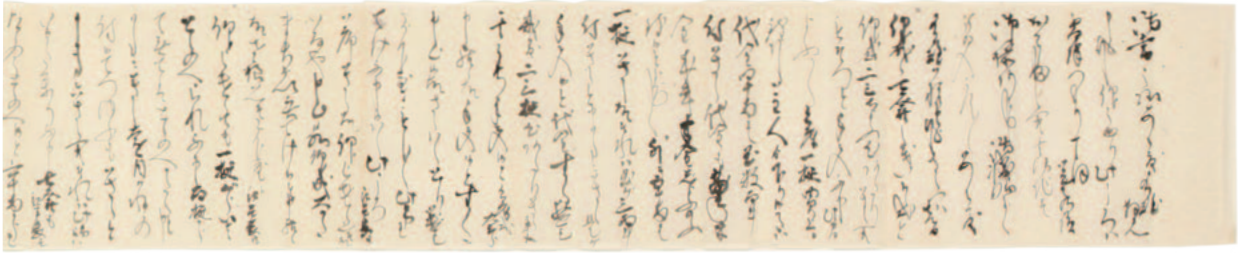
大垣藩士石川辰助が西高木家に対して、元込式ライフル銃や四斤施条砲など銃器類の周旋をしている書状。辰助は、高木家の依頼で大垣藩から多良へ出向し、高木家家臣団へ西洋流砲術を教授した人物。恵之右衛門は、高木家において大嶽弁之丞と共に西洋流砲術訓練の責任者を勤めていた。





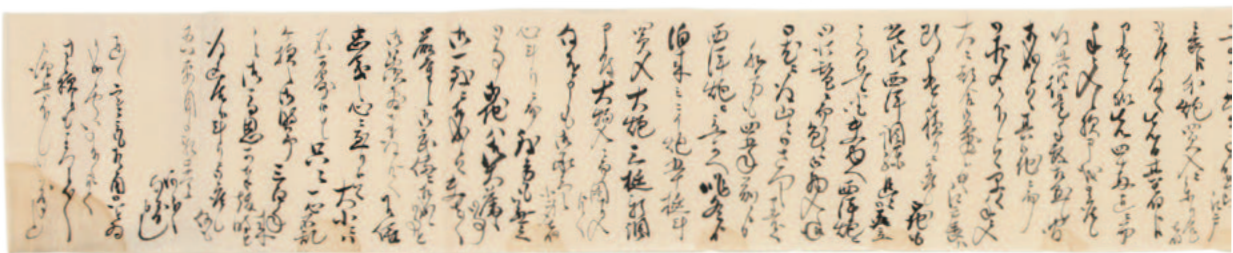
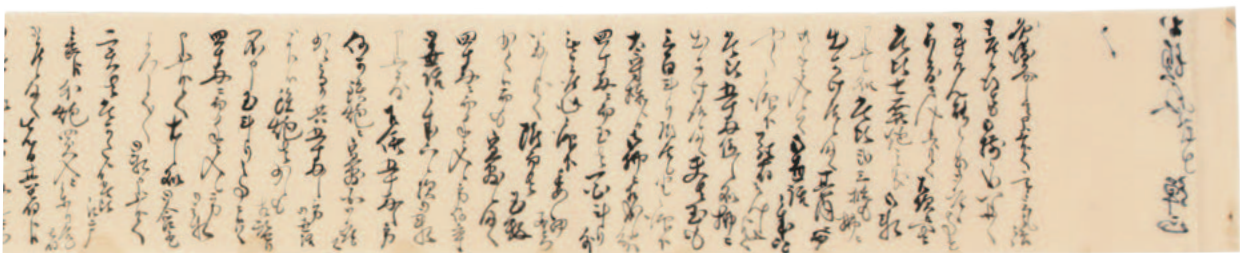
17 鎖より高木貞広宛書状 慶応4(1868)年〈高木家文書〉

高木貞広(西家12代)から依頼されていたスペンサー七連発銃が2挺手に入ったことを知らせてきた書状。鎖は、貞広の妹で、彦根藩重臣宇津木兵庫に嫁いでいた。武器の調達に、女性を媒介しておこなわれているのが興味深い。



18 高木貞広より鎖宛書状 慶応4(1868)年〈高木家文書〉

[17]の返書。貞広は、鎖が示した4両と5両の2挺の内、特別な道具が付属していないのであれば、弾丸が少なくとも安い方を買いたいと返事している。スペンサー七連発銃は、紙薬莖が普通の当時であって、金属薬莖を使用する、珍しい銃であった。



## 高木家の武術

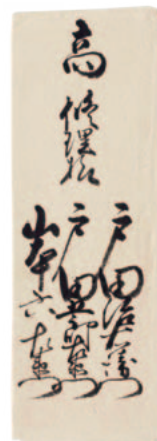
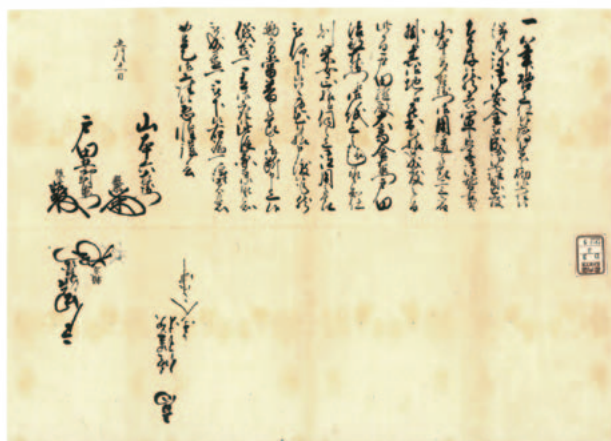
武士とは本来、戦闘を生業とする者である。「平和」な時代であった江戸時代においては、武士は政治を担ったため、行政官としての手腕も必要とされるようになったが、その一方で変事に備えて戦闘技術を身につけておくことが求められた。

多種多様な武術の中で、弓術・馬術・棒術・刀術・居合・撃剣術・薙刀術・鎌術・槍術・砲術・石火箭・<sup>かせん</sup>火箭・捕縛術・柔術の十四種は武士が嗜んでおいた方がよい武術とされた。これを武芸十四事と呼ぶ。このうち、弓術・砲術・剣術・馬術は、特に重視され武芸四門と呼ばれた。しかし、「平和」な時代が続き鉄砲は足軽が使う武器と広く認識されるようになると、砲術は重視されなくなり、代わりに槍術が重視されるようになる。なお、この他に戦争の方法を教える軍学を修める者も多かった。

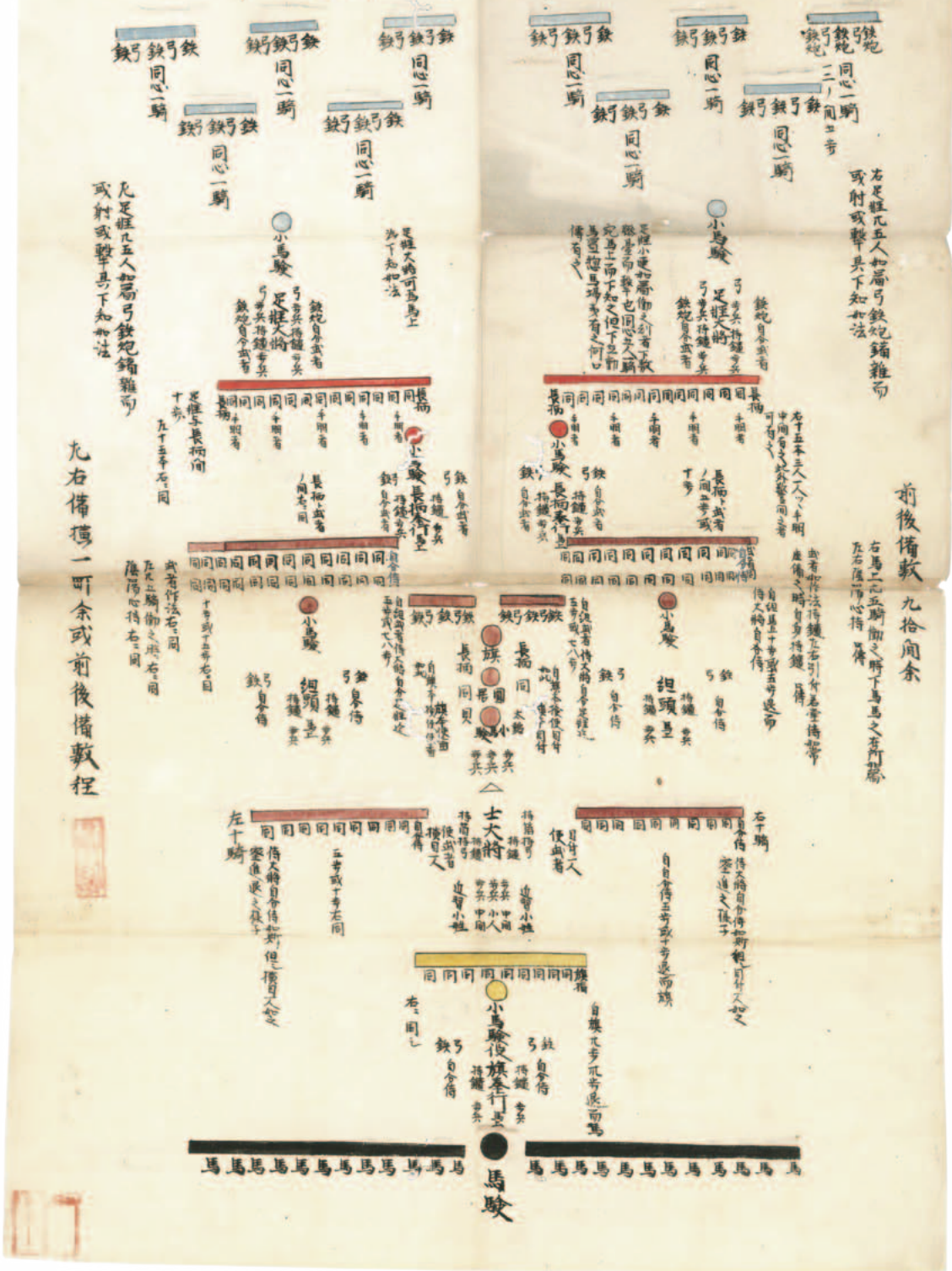
西高木家でも、武術修行の必要性を認識していたようで、大垣藩や長島藩など近隣の諸領主に依頼して指南役を派遣してもらい、当主のみならず、子弟や家臣たちに修行をさせている。特に、江戸時代最後の当主貞広は武術修行を盛んに奨励し、剣術や槍術を稽古するための稽古場「集義館」を建てている。

### 19 大垣藩戸田家家臣より高木修理宛書状 天保13(1842)年5月11日〈高木家文書〉

高木修理経貞（西家11代）は、戦争の方法を教える軍学を学ぶため、大垣藩士で甲州流系統の軍学者山本多右衛門へ入門することにした。本史料は、多右衛門が手隙の時に多良へ指導に来ることを大垣藩へ依頼した件に対する返書。大垣藩はこの要求を受け入れ、多右衛門の多良滞在を認めている。後に東家当主貞教とその子息も多右衛門へ入門した。



五行座備方圓五色繪圖

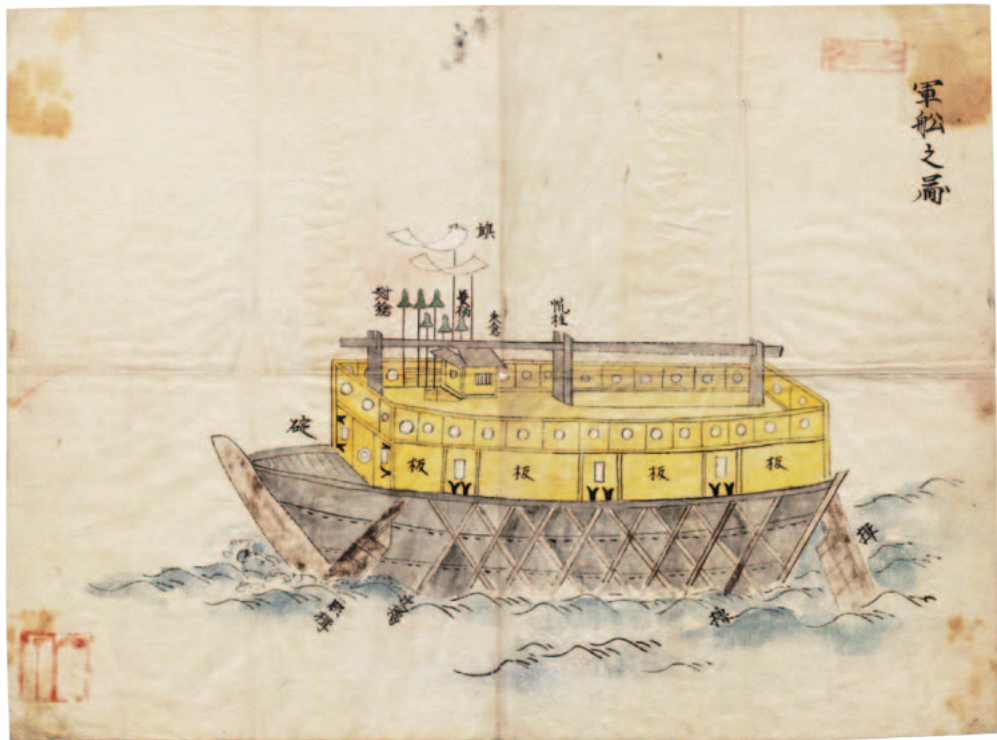


20 五行座備方圓五色繪圖 年月日未詳〈高木家文書〉

大名から指揮を任された士大將が率いる備(部隊)における各人員の配置方法を示した絵図。大名家の備は、このような備がいくつか集まって構成される。本図は学ぶ者が理解しやすいように五行を象徴する色で塗り分けられている。通常、木が青、火が赤、土が黄色、金が白、水が黒であるが、見やすくするために、土に茶色、金に黄色をあてている。

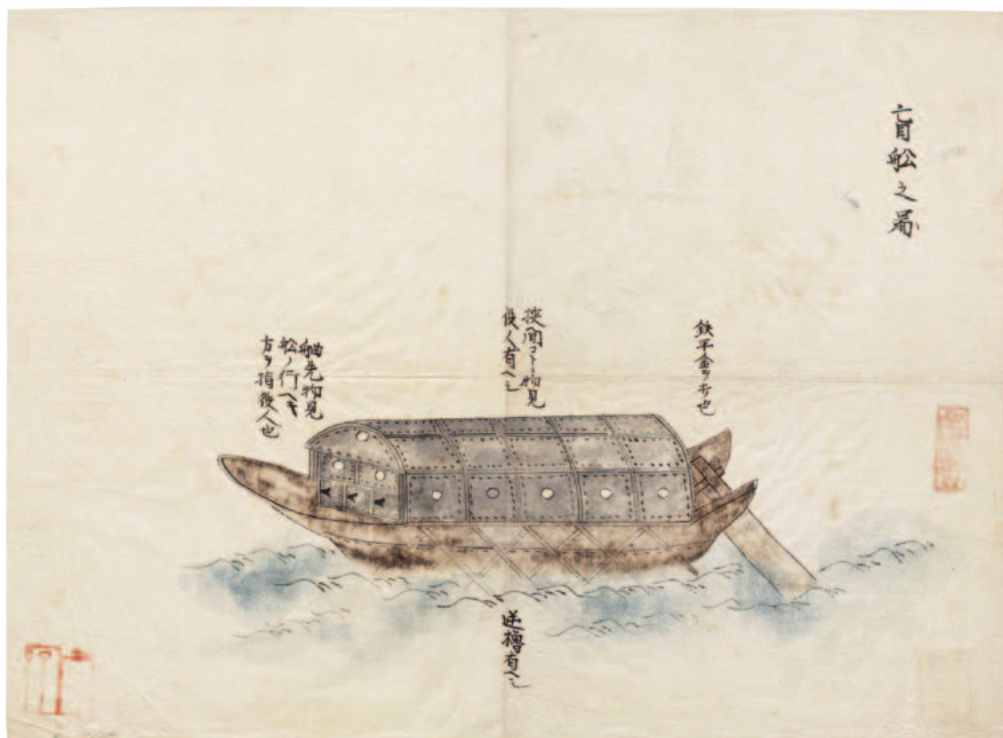
21 軍船之図 年月日未詳〈高木家文書〉

戦国時代、日本で主に使用されていた軍船は、500石積以上の大型船である安宅船、90石から480石積程の中型船である関船、それ以下の小型船である小早の三種があった。江戸時代になり安宅船の建造は禁止された。本史料に描かれているのは関船の図。



22 盲船之図 年月日未詳〈高木家文書〉

盲船とは甲板上の構造物を鉄板で囲み防御力を上げた船のこと。軍記物語『難波戦記』(寛文12〔1672〕年成立)によると大坂冬の陣において、九鬼守隆が難波橋の船入から大坂城へ鉄炮を打ちかけるのに使用したとされる。



23 <sup>ぐんせん</sup>軍扇図 年月日未詳〈高木家文書〉

軍扇とは、武者が軍陣で使用する扇。軍陣において、兵の指揮に使用するほかに、褒美品や献上物の下敷き、首実検の際に首を受け取る台の代わりにするなど多様な用途に使用された。軍学ではこれらの使用方法を学ぶ。



24 百射之定

年月日未詳〈高木家文書〉

高木貞藏（西家10代）の時代、西高木家では弓術が盛んで、貞藏や嫡子の経貞、家臣達がこぞって修行に励んでいた。本史料は、100回矢を射って、その命中数を競う競技「百射」のルールについての定書下書。



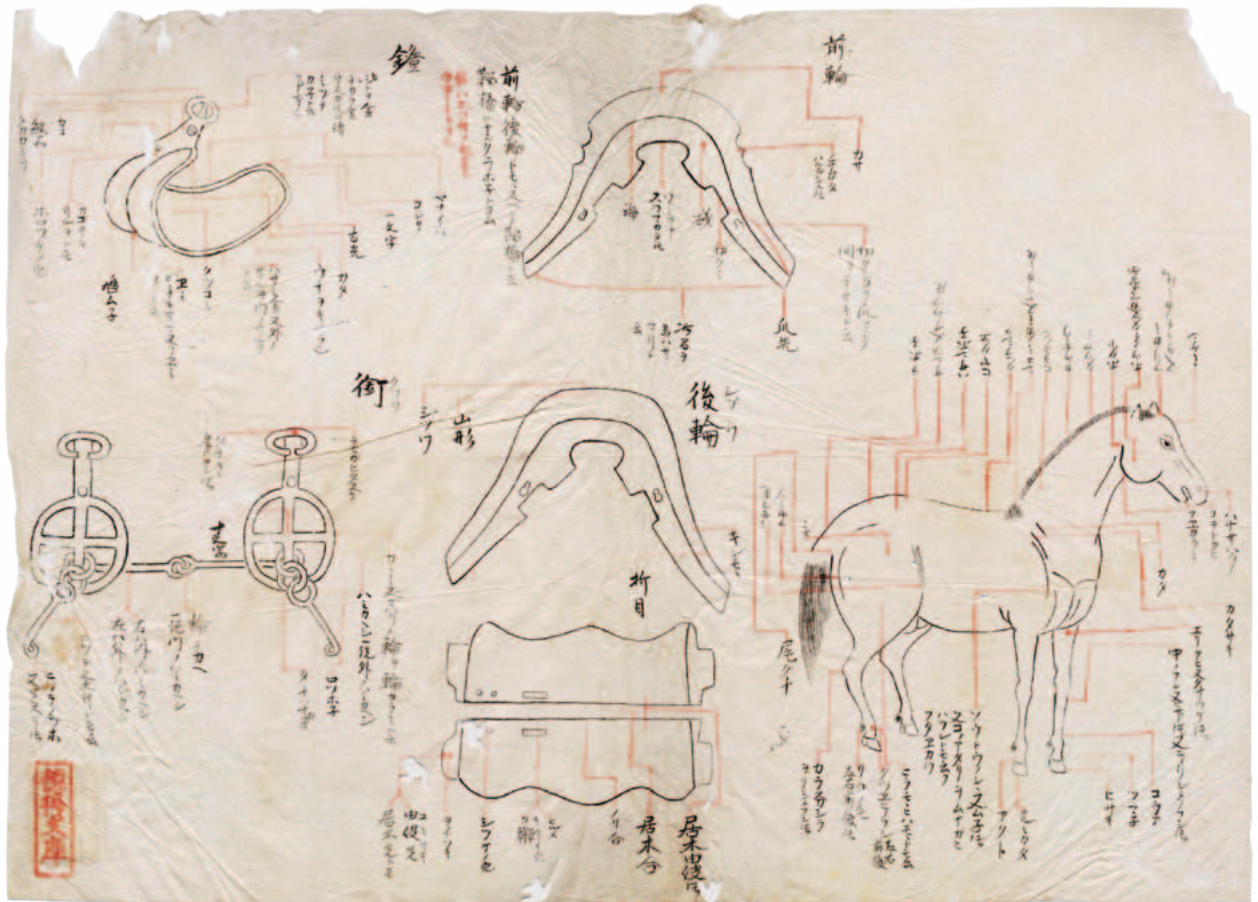
25 百射中附 文化11(1814)年6月〈高木家文書〉

百射をおこない命中した矢数を記した記録。●○が命中した矢を、一が外れた矢を表す。「中五拾五」(55本命中)の修理様は高木貞藏、<sup>さだよし</sup>「中八拾」(80本命中)の藤兵衛様は高木貞直（東家10代）のことである。東高木家でもこの時期、弓術が盛んであったようである。



26 馬具図 年月日未詳〈高木家文書〉

馬体および鞍・鏡・轡といった馬具の各部名称を示した絵図。戦陣では、士分は馬に乗って戦うことが多く、乗馬ができることは士分として必須の素養であった。西高木家の歴代当主は、大坪流や常心流といった馬術を修行している。



27 文久二壬戌年劔鎗年内出席日数 文久2(1862)年〈高木家文書〉

西高木家の家臣達が文久2年中に劔術・槍術の稽古をした日数が記されている。西高木家では、長島藩に依頼し劔術指南役を派遣してもらい、矢場で稽古をした。元治元(1864)年には常設の稽古場「集義館」を設け、いっそう劔・槍の稽古を奨励するようになる。

日数	出席者
文久二壬戌年	西高木家
百廿日	河合清房
百廿一日	林吉助
百廿二日	長瀬清馬
百廿三日	三輪徳平
百廿四日	小島清和
百廿五日	小島清之
百廿六日	小島清八
百廿七日	三輪徳平
百廿八日	三輪徳平
百廿九日	三輪徳平
百三十日	三輪徳平
百三十一日	三輪徳平
百三十二日	三輪徳平
百三十三日	三輪徳平
百三十四日	三輪徳平
百三十五日	三輪徳平
百三十六日	三輪徳平
百三十七日	三輪徳平
百三十八日	三輪徳平
百三十九日	三輪徳平
百四十日	三輪徳平
百四十一日	三輪徳平
百四十二日	三輪徳平
百四十三日	三輪徳平
百四十四日	三輪徳平
百四十五日	三輪徳平
百四十六日	三輪徳平
百四十七日	三輪徳平
百四十八日	三輪徳平
百四十九日	三輪徳平
百五十日	三輪徳平
以上	三輪徳平

ししがり  
猪狩

猪は、山芋やミミズ、昆虫の幼虫など土中のモノが好物のため、農作地を掘り返す習性がある。さらに、体に付着した寄生虫を落とすため泥浴びも好み、水田に入り込み甚大な被害を与えることも少なくない。そこで、百姓達は、しばしば領主に猪狩をおこなうよう願った。領主側は、害獣の駆除のみならず、自身や家臣の鉄砲・槍の技術を高める軍事訓練の場として利用できたため、百姓の願いを聞き入れ猪狩を催した。

山間地に領地を持っている高木三家も、しばしば猪狩をおこなっている。時には、領地外の近隣村々からの要請を受けて猪狩をおこなうこともあった。ただし、凶暴な猪を狩ることは常に危険がつきまとい、九死に一生を得るような場面も少なくなかった。

28 藤牧又左衛門より大嶽弥部右衛門宛書状 年未詳 2月15日 〈高木家文書〉

猪狩の際、急に現れ襲ってきた大猪を高木貞臈（西家10代）が冷静沈着に仕留めたことを国元から江戸へ知らせてきた書状に対する返書。藤牧又左衛門は西高木家江戸留守居役。猪狩が危険を伴う狩であった様子がうかがわれる。



29 奉差上御請書之事 嘉永5(1852)年閏2月 〈高木家文書〉

北高木家主催の猪狩に参加した淵上村の卯七が、鉄砲で疵を負ったことを隠蔽し咎められた一件に対して、領主西高木家に提出した請書。猪狩では、危険を伴うためであろう、突発的な事件・事故は全て報告することになっていたことが確認できる。



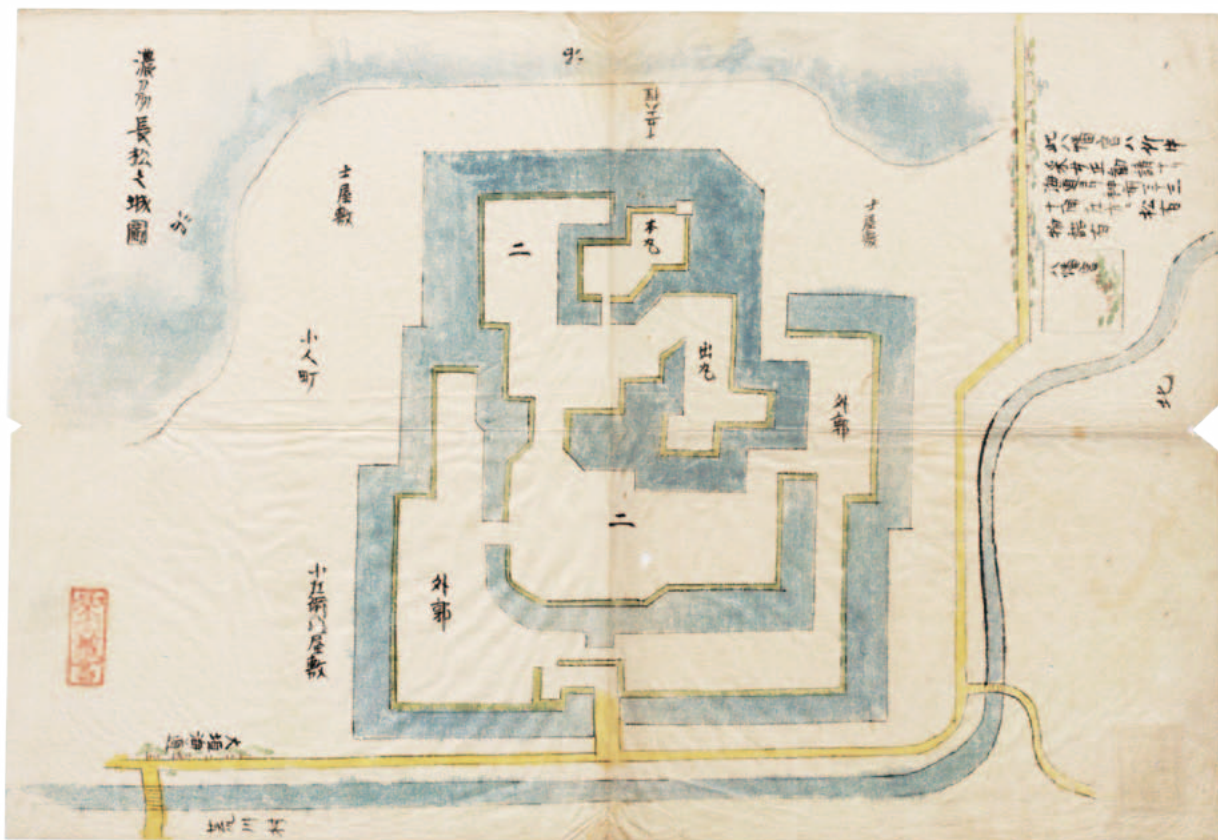
## 城縄張り図

軍学では、実際に存在する城や廃城となった城の建築プランを研究し、その一環として城絵図が作成された。また、新規に築城するとの想定で城の縄張り図を作成することもあった。弟子たちは城の縄張り図の作成を通じて応用力を高めていったのである。

【30】は永禄期(1558-1570)に竹中重元によって築かれ、その後、武光式部の居城となり、関ヶ原合戦後に廃城となった長松城を描いたもの。【31】は美濃・信濃・三河の国境に築かれた岩村城で、その戦略性の高さから、武田信玄、織田信長、徳川家康により争奪の的とされた。

縄張り図作成では、【32】のような現実的な縄張り図のほかに、オリジナリティーを出すため、非現実的で机上の空論的な縄張り図も数多く作成された。【33】【34】は曲輪が鳥や蛙のような形象にみえることから、一種のゲームのように作成されたのかもしれない。また、申年の文字を象った縄張り図である【35】のように、題名を与えられ、その題にあった縄張り図を作成することもおこなわれたようである。なお、高木貞一は西高家12代当主貞広の若い頃の名前である。

### 30 濃州長松城図 年月日未詳〈高木家文書〉

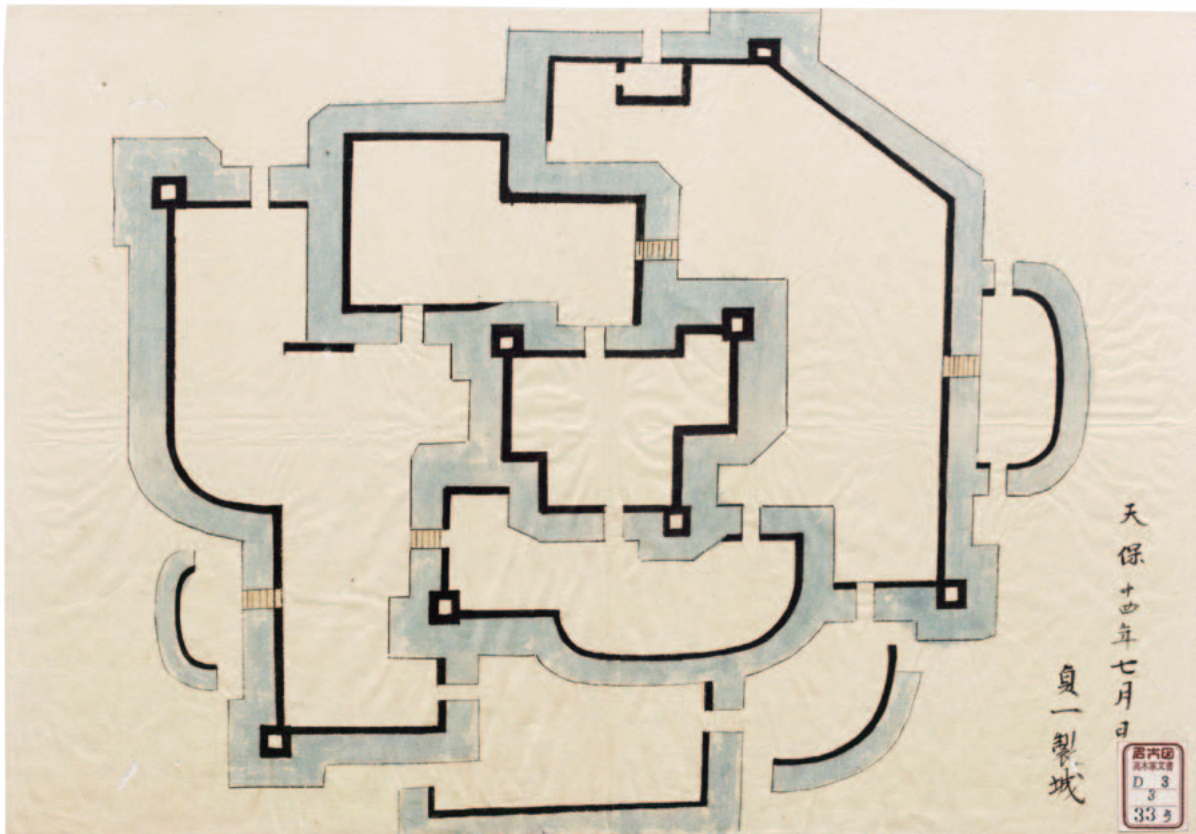




31 美濃国岩村城図 年月日未詳〈高木家文書〉



32 城縄張り図 天保14(1843)年7月〈高木家文書〉



33 城縄張り図

天保14(1843)年8月〈高木家文書〉



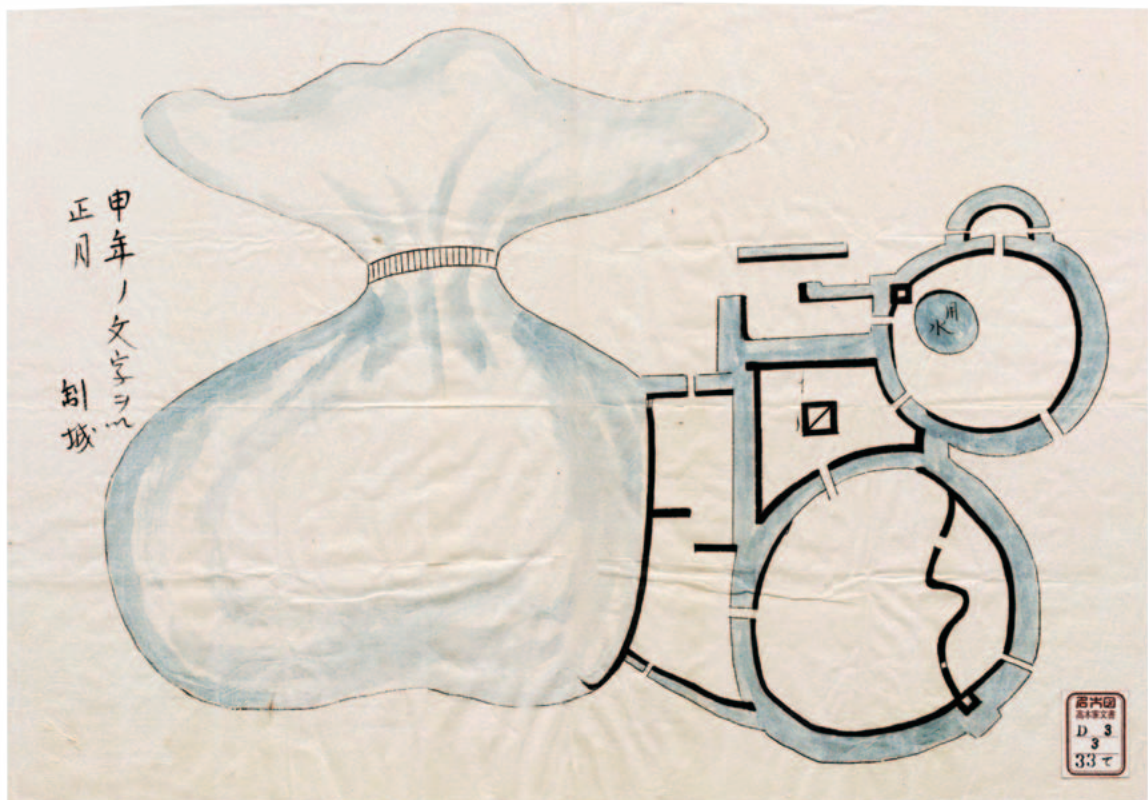
34 城縄張り図

天保15(1844)年4月〈高木家文書〉



35 申年ノ文字ヲ以制城

年未詳正月〈高木家文書〉



名古屋大学附属図書館  
附属図書館研究開発室

館長・室長 森 仁志  
特任准教授 石川 寛

(総括責任、図録編集)

研究協力 長屋 隆幸  
(展示担当、図録執筆)

辻 公子  
高橋 菜月  
桐井 吉美

調査・展示協力

筒井 稔

高木 久子

大垣市教育委員会

(敬称略・順不同)

事務担当

情報サービス課長 次良丸 章

同課長補佐 伊原 尚子

名古屋大学附属図書館2015年秋季特別展（高木家文書展）

## 高木家の武

会期：2015年11月13日（金）～12月7日（月）

会場：名古屋大学中央図書館2階ビブリオサロン

主催：名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

### 参考文献

高木照一「交代寄合高木家における領主制 ―猪狩を事例として―」（名古屋大学卒業論文）

長屋隆幸「交代寄合西高木家における幕末軍制改革」『名古屋大学附属図書館研究年報』9 2011年

長屋隆幸「軍学と後藤家石垣秘伝書」『城郭石垣の技術と組織』石川県金沢城調査研究所 2012年

針谷武志「内陸旗本と海防 ―交代寄合高木家を例に―」『地方史研究』224 1990年

綿谷 雪『図説・古武道史』青蛙房 2013年

新修上石津町史編集委員会編『新修上石津町史』上石津町教育委員会 2004年

大類伸監修『日本城郭全集』7 人物往来社 1966年

本図録は JSPS 科研費15H03237および平成27年度地域貢献特別支援事業の助成を受けたものです。

名古屋大学附属図書館2015年秋季特別展（高木家文書展）

# 高木家の武

---

発行日 2015年11月13日

編集・発行 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 B3-2(790)

TEL : 052-789-3678 (受付) FAX : 052-789-3694

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/>

ISBN 978-4-903893-14-3